やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」（青森）発行

誌　　名	やぶなべ会報
号/発行年/頁	28 / 2010 / 35-36
タイトル	ヒメシロチョウ
著　者　名	五十嵐正俊

ヒメシロチョウ

第3代　五 十 嵐 正 俊

高校生物部で初めて部費で捕虫網を買った頃、夢中でチョウなどを追いかけていた。その頃、三内、浪館辺りの丘陵地帯は一面採草地でごく普通に飛んでいたのが「ヒメシロチョウ」であった。飛翔スピードも遅いので最も捕獲し易いチョウだった。

定年退職して、35年ぶりに故郷に舞い戻り、海の見える郊外の丘に住み着いたのだが、35年間の空白の間に故郷の自然は大きく変貌していた。少年時代、しょっちゅう訪れて黒く熟した「ヤマグワ」や「ナツグミ」の実を食べ、「ナツグミ」の大きな株によじ登って食べていた、浪館、三内の採草地は環状バイパスが通っている。

採草地に出る最後の登り道は赤土で、雨で掘れた溝が出来ていたのだが、今ではその辺りに立派な慈恵会病院が建っている。

蹴っ飛ばすと「アカエゾゼミ」がギギッと鳴いて落ちて来た、細い「アカマツ林」は運動公園のフエンスの中に取り込まれていた。

浪館の集落を過ぎていよいよ山道になって「漆掻き」の行われていた場所を通るのだったが、誘って一緒に付いて来た隣家のY君は気の毒なほど「ウルシ」に敏感で、ただ「ウルシ」の木の下を通っただけで翌日から1週間ほど「漆かぶれ」で学校に行けなくなるのであった。

ところが、35年ぶりに舞い戻った故郷の山では採草地は消えて、国特別史跡になった縄文遺跡の発掘場所も近く、遠足の折に沢目に降りて「サルガニ」（ニホンザリガニ）を獲って遊んだ故郷の山は無かった。

そして、「ヒメシロチョウ」も「キリギリス」の長閑な鳴き声も聞かれなくなっていた（最近遺跡地内へ出るトンネルを抜けると鳴いている）。浪館、三内地区ばかりではなく、青森市の市街化地域はかっての郊外に広がり、自然環境は激変していたのだ。私自身、家を建てるべく土地を探したら予算的にも郊外の丘の上くらいが妥当な価格だった。

以来10数年、「ヒメシロチョウ」は細越の「夢の森」で見たような気もするが確実に認識できる程ではなかった。

今年（2010年）になってずーっと空き地になっていた。我が家の前の土地に買い手が付いてモダンな家（ツーバイフオーによる建築方式）が新築された。

関心があるので家の前でその工事の様子を見ていた。すると白いチョウがヒラヒラと舞い上がり、また足元の砂利に舞い降りた。暑いので水で濡れていた砂利で吸水している様だった。良く見ると何十年振りかで見る「ヒメシロチョウ」だったのだ。急いでカメラを持ち出して撮影したのが画像の写真である。

図鑑によれば幼虫の食草はマメ科植物の「ツルフジバカマ」だという。そう言えば以前、家のすぐ近くの岩渡方面に繋がる旧道沿いで、見かけないマメ科植物が気になって花の写真を撮っていたのを思い出した。古い画像データを探して画像を見たが決め手になる小葉の数、托葉の状態など判然としない。

外出した序にその場所に行って見た。確かに図鑑の説明通りの「ツルフジバカマ」の群落を確認した。まだ花は咲いておらず、小さな花穂が見えているので9月にはなれば今年も花を咲かせるだろう。

その広がりは4m四方程度の範囲ではあるが比較的高密度に「クズ」などと混生している。多分その場所で繁殖した1個体が水気を感じて足元に舞い降りていたのだろう。

旧道の道端で、刈り取られる可能性もあるので機会を見て「しらかばビオトープ」への移植も考えている。（2010.08.22）

[写真1] ヒメシロチョウ（2010.8.10 青森市新城）

[写真2] ツルフジバカマ（2010.8.22 青森市新城）

[写真3] ツルフジバカマ（2010.8.22 青森市新城）

[写真4] ツルフジバカマ（2010.8.22 青森市新城）

[写真5] ツルフジバカマ（2010.8.22 青森市新城）

[写真6] ツルフジバカマ（2007.9.8）